地球環境を考えるコラム

大日化成エコへの取り組み

近年、夏は猛暑で、冬は寒波の異常気象が続いています。今年も暑い夏がやってきました。岡山県北にある弊社岡山工場付近は夜ともなれば都会に比べ比較的気温が下がりますが、日中はうだるような暑さが続き、エアコンをつけてもなかなか効きません。そこで対策としてゴーヤ緑化を数年前から続けています。ゴーヤ緑化には室温の上昇を抑える効果がありますが、毎年5月の連休明けに植えたゴーヤが育ち緑のカーテンが出来上がるのは、早くても6月中旬です。

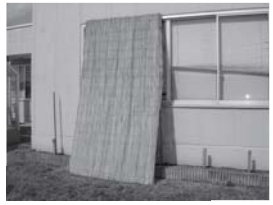
昨年の夏の事でした。まだ、ゴーヤの育成が不十分な頃、真夏日で雨が数日降らないという日が続いていたところ、暑さ対策として他に何かできないかと考え、思いついたのが日本の伝統でもある「よしず」の利用です。

「よしず」は日光を遮りながら風を通し、見た目も涼しく風情ある便利なものです。室内からブラインドをするよりも効果は高く窓の外側で日射を遮蔽するためエアコンの効きもよくなり、電気代も節約することができます。

早速、ホームセンターに「よしず」を買いに走りましたが、誰も考えることは同じですね。ほんの1週間くらい前にはたくさんあった「よしず」が、ほとんど売り切れ状態で次の入荷時期について問合せしても未定とのこと。どこのホームセンターに問い合わせても同様に在庫切れの状態でした。

そこで思いついたのが、以前使用して古くなった「よしず」の再利用です。3年くらい使用し、傷んだものの大きすぎて廃棄処理に困り保管していたものです。

その古くなった「よしず」の表面にビッグサントップUR（遮熱塗料）を塗ってみました。表面は遮熱塗料を塗布することにより遮蔽効果がさらに高まり裏面は手を加えていないため室内から見る景色は「葦（あし）」で風情があります。



「よしず」は今年は4月中旬から活躍しています。

大日新聞に関するお問い合わせ・ご意見などはホームページ及び
大日化成株式会社 06-6909-6755 までお願いいたします。

スタッフ紹介

日頃は営業活動やお電話で応対させていただいておりますスタッフの日常をお伝えいたします。

岡山工場製造部の一ノ瀬と申します。入社して間もなく1年になりますが、まだまだ日々の業務ではいろいろと苦労することも多いです。

入社当初は体力面が大きな問題になりました。製造部は力仕事がほとんどなので毎日充填作業をするだけでかなり体に負担をかけていたように思います。

私は中学、高校と硬式野球をやっていて体力には自信があったつもりでしたが、働きだしてから仕事で使う体力とは別物であると感じました。

しかしながら、1年間の経験というものは大変大きなもので、体力だけが全てではないことを学びました。やはりどんな作業にもコツがあって、それさえ掴めたらあまり力は使わなくてもそれまでと同等以上の作業ができます。なので最近では、いかに力を使わずいかに作業できるかコツを探しながら働いています。

最近では充填作業だけではなく、製品を練る作業も少しずつではありますが行っています。

作る製品の数が多いことと、製品ごとに作り方や覚え違いがあるため一苦労です。効率良く作業しないと練るのに時間がかかってしまったり、体力だけではなく頭も使わないといけないので大変ではありますが、毎回作るごとにいろいろな発見ができて面白いです。

私が製品の製造を通して意識していることは、同じものを同じように作ることです。

当たり前のことなのですが、これほど難しいこともないように私は思います。時期によって少しの作り方が違う製品があったとしても、毎回同じものを作らなければならないのので難しいですが努力しています。同じ品質のものを毎回作れてこそ、お客様の信頼に繋がると思うので、これからも毎回変わらず品質の良いものをお客様にお届けできればと思っております。

職場についてですが、製造部は仲も良くお互いに助け合って仕事ができているので仕事でのストレスも無く、毎日楽しく仕事をさせてもらっています。まだまだ先輩と同じように製品を作ることはできませんが、仕事面でも人間面でも先輩方を見習ってこれからも頑張っていきたいと思います。

製造部 一ノ瀬 直哉

DAINICHI CHEMICAL CO.,LTD.

●本社
〒571-0030　大阪府門真市末広町 8-13
TEL：06-6909-6755(代)　/　FAX：06-6909-6702

●東京支店
〒105-0013　東京都港区浜松町1-2-5
TEL：03-3436-3801(代)　/　FAX：03-3436-3803

次号もお楽しみに

URL：http://www.dainichikasei.co.jp

映画で学ぶ環境問題 Vol.17

ご存じ、今は亡きキング・オブ・ロックンロール／エルヴィス・プレスリーがハワイを舞台に唄い・踊る1961年の映画。ひたすら大スター・プレスリーの魅力をまき散らすためだけに制作されたような作品のため、ストーリーはあって無いようなものですが、往年のファンやプレスリーを知らない世代にとっては、新鮮な作品でしょう。

オープニング即座に映し出されるダイヤモンドヘッドとワイキキビーチの映像。意外やワイキキ周辺に、ほとんど大きな建物はなく、わずかに1棟高層ホテルの建築途中なのが見てとれます。中盤に出てくるピクニックのシーンでも、夜景で有名なタンタラスの丘「プウ・ウアラカア州立公園」（公園・広場は日中のみ入場可）からワイキキ周辺が一望できますが、昨今の賑わいぶりを知る人からすれば、50年前のハワイがいかに未開発だったのかと驚くことでしょう。

BLUE HAWAII
（ブルー・ハワイ）

監督　ノーマン・タウログ
脚本　ハル・カンター
出演　エルヴィス・プレスリー
共演　ジョーン・ブラックマン
　　アンジェラ・ランズベリー
公開　1961 年

今回この映画を「映画で学ぶ環境問題」として取り上げたのは、そういった「開発と環境」について書きたかったことがあります。特に「自然と開発の調和」そして「風」と「砂浜」について。

私達が「環境問題」を考える時、一部の人は「開発は自然破壊で悪」といった思考に陥るようです。これはこれで決して間違ってはいませんが、一方で、「自然のまま開発されていなかったら、今ほどハワイは人気スポットだったのか？」ということも考えさせられます。

誰もが憧れる南国リゾートの最高峰・ハワイ。

ここに別荘を持つことは、世界中のセレブにとっては当然の約束。

けれどそれは、リゾート地として開発されてきたからこそ的結果であって、今なお何もない自然だけの島であれば、ここまで多くの人々を魅了しなかったことでしょう。もし手つかずの自然だけが良いのであれば、他にいくらでもあるのです。けれど、魅力的に開発されるからこそ憧れ、調和された土地を訪れるからこそ知る自然の良さ・大切さ。

実際に触れて初めて「環境について、ちゃんと考えなくては！」と気づく人が多いのも、事実なのです。

つまり、乱開発は絶対にだめですが、自然の大切さを学ぶためにも、ある程度の開発はやむを得ない部分があるということ。であれば、自然との共存・調和を最大限考えたうえで、私達はリゾート開発をしていかなければ、ならないということです。

さて「風」についてですが、屋外ロケの各場面を見ていると意外に風が強いことが見てとれます。昔から知られる通り、ハワイは貿易風が有名なのですが、最近のワイキキ周辺の繁華街では大きな建物が増えてきたせいか、この映画ほど強い風を感じることがありません。

そして「砂浜」といえば、ご存知ワイキキビーチですが、約3kmにわたって続くこの世界的に有名なビーチが、実は人工浜だということは意外に知られていません。元が湿地帯だったため、あの広大な浜の砂は当初、オアフ島北部のノースショアから運ばれてきたのだそうです。

肝心の本編に話を移しますと、除隊してハワイに戻ってきたプレスリー演じるお金持ちの息子チャドと、恋人マイリのロマンスを中心に描かれるのですが、最後はカウアイ島で催される二人の結婚式がエンディング。

「ハワイで結婚式」が女性の憧れになったのは、この映画のおかげといっても過言ではないでしょう。

貿易風や人工浜のワイキキビーチ、そして当時の未開発の様子など、予備知識を元に鑑賞すれば、誰もが知る「アロハ・オエ」やハワイ結婚式の定番「ハワイアン・ウェディング・ソング」、そして「ブルーハワイ」という名曲とともに、子供達も一緒に観られる映画として、気軽に楽しんで頂けることでしょう。

オアフ島 ワイキキビーチ